

---

## 映画「日本南極探検」について

～いつ、誰が、何を撮影したのか～

岩 佐 圭 子

---

この映画は、明治45（1912）年、白瀬轟中尉の南極探検にMパテー社のカメラマン田泉保直が同行して撮影されたものであり、日本映画史上、早い時期の記録映画として有名である。時期のことばかりでなく、その内容もまた評価できるものである。例えば映画評論家佐藤忠男は次のように述べている。「とにかく、現存する明治時代に日本人カメラマンの撮った実写としてははじめて、一介の水夫とか作業員までが、一人一人、正面からカメラを向けられて、カメラに向かってニッコリと挨拶をおくっているのである。出発の直前の部分で、隊員全員を一人一人、ワン・ショットずつ、おなじフル・ショットで紹介するシークエンスがあるが、隊長や船長から一水夫にいたるまで、ほぼ同じ分量で平等に見せている。決して隊長だけを英雄的に見せて水夫を無視するということはしていない。そこが気持が良いのである。これは日本の記録映画で最初の、撮影と編集によってひとつの価値観を示した例といえるだろう。」（日本記録映像史、p.26）また、土本典昭はドキュメンタリー映画監督らしい感想を述べている。「だが何と少ない手持フィルムだったことか。（中略）とはいえこの『南極探検』には記録を念頭においたカメラワークがある。流氷や巨大な冰山、そこでのペンギンの生息にもカメラをむけている。だが恐らく、手もちフィルムが窮迫していたに違いない。はじめての航海記録、南極接岸のプロセス等に興味をもちつつも、残りのフィルム量を計算しながら全体の構成も考えたであろう。そうした苦心のあとがこの作品からつたわってくる。（中略）」

撮れたフィルムはすべてつながれ、如何ようにも解説の材料となり得たにちがいない。写っていないとか、破損したといった技術的NG以外はほぼすべて上映された。それが当時の映画の観客の求めであったかもしれない。奇妙にもそれはその点で田泉保直は日本で最初のドキュメンタリー映画の試みに苦しんだ先駆者であったといえよう。起承転結を考え、旅と冒険のドラマを予想しつつ日々を撮った彼の撮影ノートがもし残されていたら、日本記録映画の黎明期を早めえたにちがいない。」(講座日本映画1：日本映画の誕生、p.328)

映画「日本南極探検」は、探検隊の帰国直後の明治45年6月28日、浅草国技館で一般公開された。公開当時はこのタイトルはなく、単に「南極実景活動写真会」と称していた。(東京日日新聞、明治45年6月28日号広告。この興行とともに「南極土産展覧会南極旅行」と称する展示が国技館付属芸芸場で行

われた。活動写真の上映は7月21日まで行われた。) (図1) 後年、この「南極実景」が再編集されて現在我々が目にする「日本南極探検」ができた。「南極実景」の公開の早さについては、理由がある。南極探検の後援組織である「南極探検後援会」では、隊員船員の給料、借財の返済など探検費用の支払手段として、この記録映画、当時の言葉でいえば活動写真を考えていた。(南極記、p.463) そこで田泉保直は隊長の白瀬ら5人とともに、隊とは別行動となり、3月30日途中寄港地ウェリントンを発ち、

●古今獨歩の壯觀  
主催 南極探検後援會  
六月廿八日

育を模の一大參考館  
育を模の一大參考館

育を模の一大參考館

●未曾有の壯舉  
●賜臺覽  
●南極實景活動寫真會

本日より開演す  
本日より開演す

古今無類  
古今無類

南極旅行  
南極旅行

於附屬演藝場  
於附屬演藝場

長くも東宮殿下同妃殿下を初め奉り皇孫殿下各宮殿下の御尊覽を忝うせし我南極探検隊が三年千辛萬苦死生を暗し御尊覽を忝うせし我南極探検隊が三年千辛萬苦死生を暗し本日より開演す本日より開演す

我探檢隊が南極大氷界に於て採集せる大珍石、南極名物ベ  
ンギン、鷹、雪鳥、燕、大海豹より探檢用の學術器械、防寒具  
等を陳列し是れに南極州の新天地を配して大氷山、大氷海  
を模造し坐ながら南極に旅行するの感あらしむ學術上教  
育上の一大參考館

図1 東京日日新聞  
明治45年6月28日号にのつた  
「南極実景活動写真会」の広告

5月16日に横浜に帰着したのである。帰国後フィルムはMパター社顧問吉本敬三によって現像された。光線不足の撮影であったため、現像は困難なものと思われたが、吉本の尽力により公開可能なものとなった。島崎清彦の論文によれば、冷蔵して持ち帰った半分は問題がなかったのだが、冷蔵しなかったフィルムが露出過度状態であった。この部分の処理を吉本が行ったということである。（「白瀬中尉南極探検の記録映画とその技術」映画テレビ技術 No.202、1969.6）まず、赤坂萬歳館で新聞記者たちへの試写が行われた後、6月25日、青山御所で大正天皇・皇后、昭和天皇、秩父宮、高松宮らの台覧を仰いだ。Mパター社の活動写真技師も同行し、白瀬が映画の説明をした。（南極記、p.465～466）東京日日新聞（明治45年6月26日号）によれば、20余種の写真を映写したとあり、皇族方は氷山浮流の光景、帝王ペンギン鳥狩、海豹捕獲、ノルウェー船フラム号との邂逅に興味を示された。（早稲田大学図書館蔵「日本南極探検」においてはフラム号との邂逅のシーンは確認できない。しかし「白瀬南極探検隊記念館」蔵のものにおいて確認できる。それは、白瀬隊が南極に上陸し、荷揚げをしているところの後方に何とフラム号が映っている！）このあと、先述の浅草国技館での公開となり、以降各地において公開した。「京都、大阪、神戸、名古屋等の方面に向かって一組、北海道方面に向かって一組、今一組は九州方面其他に向ひ、弘く興行を開催した。」（南極記、p.466）また後年、「白瀬中尉南極探検二五周年祝賀記念会（筆者註：昭和11年）席上に再公開されて世人に新たな記憶を与えた。」（日本映画発達史Ⅰ、p.166）

映画「日本南極探検」は、現在東京国立近代美術館フィルムセンターに保存されている。35ミリフィルムで、上映時間は15 fps（一秒間に15コマ送り）の速度で映写して20分である。早稲田大学図書館にもフィルムセンター所蔵のものとはほぼ同一のもの（字幕8に該当する隊員船員紹介の映像で「村松会計主任」のあとの字幕「西川糧食係」がぬけている。西川当人の映像はある）が16ミリフィルムで保管されている。上映時間は16 pfsで18分である。また、秋田県金浦町（白瀬隊長の生家がある）の「白瀬南極探検隊記

念館」にも保管され、記念館において随時上映されている。この記念館所蔵のものは早稲田大学図書館、フィルムセンター所蔵のものより長く（ビデオで46分ほど）、それらにはない映像が含まれている。（フィルムの映写速度で上映時間は多少異なる）1997年5月のオールワセダ文化週間の催しの中で早稲田大学図書館蔵のフィルムを上映するにあたり、映像と実際の探検の記録を照合してみたところいくつかの疑問と確証が出てきた。本稿ではこれについて私見を述べていきたいと思う。

映画「日本南極探検」は、出発前、出発、探検隊員の紹介、航海、南極到着、探検、帰国、祝賀式ときちんとした時間の流れにそって編集されている。そして、人々の興味をひくであろう探検用具、ペンギンやアザラシの様子などが挿入されている。辻褄の合った流れ方をしていて、みる側にとって、わかりやすいものとなっている。その流れは、今テレビでみるようなドキュメンタリー番組とそれほどちがわない。しかし、この繋がれて映画の時間的流れを形成している映像は、実際の時間の流れ、つまり探検の流れ（＝史実）と合っているのだろうか。字幕（おそらく再編集に伴って挿入されたと思われる）と編集によって、辻褄合せがなされているのではないだろうか。これが、探検記録を読み、映画をみて、出てきた疑問である。ただし、この私論で“辻褄合せ”が良いとか悪いとか結論づける意図はない。ドキュメンタリーにおける、いわゆる“演出”については別に論じられるべきことと考える。検証の方法としては探検隊員多田恵一が著書「南極探検日記」に撮影に関する記録を残しているので、その記述を順次引用し、映像と比較検討した。そしてその映像がいつ、何を撮ったものなのか、また、字幕や実際の探検との矛盾などについて考えてみた。先述の土本いうところの“撮影ノート”として、多田の記録が活用できると思う。また随時、白瀬南極探検の公式記録である「南極記」に掲載された写真・文章を参考にした。

映像については早稲田大学図書館蔵「日本南極探検」（16ミリフィルム）をビデオテープに変換したものを使用した。白瀬南極探検隊記念館蔵の映

画もビデオで使用することができたので、こちらも参考にした。(文中で前者を早稲田版、後者を白瀬記念館版とする) なお、映画「日本南極探検」字幕、探検関係年表、南極探検隊員一覧は文末に付した。

多田恵一は南極探検隊公募に、真っ先に名乗りをあげた人である。日露戦争従軍後、何か痛快な事業に身を捧げたいと思っていたので、願ってもないチャンスと探検に参加することにした。多田は、元来文章を書くのが好きだから、探検誌や記録の係を引き受けましょうと白瀬隊長に申し出、書記長に任命された。しかし、最終的に白瀬隊長と合わず帰国当日の明治45年6月20日早朝、横浜で下船してしまい、どたんばで隊員をやめてしまった。だが、白瀬と対立しながらも、航海・探検中と詳細な日誌をつけている。網淵謙錠も「極：白瀬中尉南極探検記」のなかで「書記長という仕事を任せられただけあって、その報告もなかなか詳細で参考になることが多い」(p.312)といている。白瀬隊長も「文筆の士にして」と多田のことを自著「南極探検」の中で述べている。多田のかきとめた日誌が、帰国後「南極探検私録」(明治45年7月、啓成社刊)「南極探検日記」(大正1年8月、前川文栄閣刊)として出版された。

田泉保直が探検隊に同行するのは、明治44年11月19日にシドニーを発った、いわゆる第二次探検である。簡単に探検の事情を説明しておく、明治43年11月29日品川を出港し、明治44年3月12日南緯74度付近まで進むが、海が凍り始めきわめて危険な状況となったので、3月14日、シドニーへ引きかえし再度挑戦することを決定した。(第一次探検)半年間シドニーに滞在し、探検準備をしながら再出発の時を待っていた。この時に、田泉は、再挑戦に関する用事で一時帰国していた隊員の多田恵一とともにシドニーへやって来たのである。シドニー到着は明治44年11月15日である。田泉の回想が映画史家田中純一郎によって残されている。「私は明治二十一年の生れですから、二十三歳の時、つまり明治四十四年十月十九日にシドニー停泊中の南極探検隊に向かって出帆、途中三十二日かかったと記憶します。カメラは二百フィート入りのワーウキック。(中略)探検隊を応援した大

隈重信伯爵からの要請でパテールから撮影班を出すことになり、希望者を募ったところ誰も行くとはいわない。その席に折悪しく私がいなかったので、欠席裁判のように、お前が行くことになったという。(中略) 四千フィートの生フィルムを、湿気を防ぐために罐へ入れ、さらに桐の箱やボール箱に入れました。(中略) 何分にも白一色で妙味がなく、犬ぞり(筆者註：犬ぞりの映像も早稲田版では確認できなかった。しかし、白瀬記念館版のもではこれもまた確認できるのである!)や隊員の動静をうつし、氷山の亀裂するところや、その流出などが精々でした。」(日本映画史発掘、p.76~78) Mパテール社との契約は多田の日記によれば「梅谷<sup>(ママ)</sup>庄吉氏(筆者註：Mパテール社社長、正しくは梅屋)は活動写真機一式を、我隊に提供し、其代り成功の暁には、二ヶ年間隊で其フィルムを発行して、後はパテール商会に引渡すこと。田泉技師の給料は、在隊中隊から支弁する事、二ヶ年間隊にて興行中、純益の二割をパテールに渡すとの、条件付であった。」(南極探検日記、p.260) 横浜での田泉の出発(明治44年10月14日)を見送る風景が同上の日記に綴られている。「一時間後、田泉技師も、盛んなる楽隊に送られて、Mパテール商会の轍竿、幾本に囲まれて到着した。田泉君は、麴町の邸宅から、この通りに騒がれて、来たのだといふ、流石は活動式だと思ふ。」(p.267) 麴町の邸宅というのは、Mパテール社の事務所が三番町にあったので、そこをいっていると思われる。こうして、田泉は探検に同行することとなり、南極を初めて撮影したカメラマンとして日本映画史上に名前をとどめることになった。

多田の「南極探検日記」(以下、日記)に即してすすめていこう。活動写真撮影の記述が最初に現れるのは、第一次探検の出港日、明治43年11月29日の頃である。ただし、ここはまだ田泉は関係がない。「我等は芝浦の埠頭、河港課の棧橋から、連絡の端艇に乗じた。この端艇には、後援会の幹事諸氏、各新聞記者及各学生の代表等も共に便乗する。(中略) 此時廣目屋の活動写真部は、其光景を活動のフィルムに納れた。」(日記、p.3) 字幕7にでも該当する場面であろうか。

ところで田泉が同行する前におきたことをフィルムに撮ったのは誰なのだろうか。字幕でいえば1～7に該当する映像である。たとえば、字幕3に該当する大隈邸の送別会について検討してみよう。(送別会は明治43年11月26日に行われた。字幕3の出発前日ではない) 田泉同行前で撮影者名がはっきりしているのは、先述の多田の日記にある品川出港(11月29日)の光景を撮影した廣目屋である。また「南極記」によると「大隈邸送別の光景及び開南丸品川湾出港の光景の活動写真(筆者註:字幕3～7に該当する映像と思われる。)に若干の外国探検隊に関する幻燈を加へて、それを以て東京宇都宮其他に於て興業することゝした。」(p.452)とある。この興行はもちろん資金繰りのためである。送別会と出発の光景を別々の活動写真屋が撮影するということもありえるが、当時そのような会社が多くないこと、送別会と出発の日にちが近いことを考えると、送別会及び品川出港の様子は廣目屋が撮影したとするのが妥当であろう。字幕5、6に該当する映像は、11月28日の芝浦での送別式の様子である。これも、一連の流れからみて廣目屋が撮影したのだろう。

前後するが、字幕2に該当する映像。ここは探検用具が写しだされ、科学ドキュメント風な所である。探検ドキュメンタリーの導入部分としてのを得た構成と思われる。誰が、いつ撮ったのだろうか。探検用具などは11月24、25日の開南丸一般公開時に船内で展示された。この時撮影したものだろうか。そうであれば廣目屋が撮影したと考えられるわけだが、この映像は前述の「南極記」の文章から推測すると、東京宇都宮で興行された活動写真の中には含まれてはいないようだ。なぜ、興行に含まれていないのだろうか。興行時点でこの映像はなかったとすれば、大隈邸送別会～品川出港の一連を撮影した廣目屋ではない別の撮影者がいたことも考えられる。撮影時期も探検出発前であったかどうか。後から撮影してここに繋ぐことは可能である。もちろん、出発前のできごとをすべて廣目屋が撮ったと考えることも可能である。探検要具の映像が前述の興行には、何らかの理由で入らなかったと考えるのもおかしくはない。字幕1出発前、上野の山で

の犬の訓練の映像。渡部誠一郎著「雪原に挑む白瀬中尉」によると第一次探検時に集めた犬を「上野公園まで疾走させるなど見せ物的なこと」(p.155)をしたとあるので、この時撮影したのであろう。(白瀬記念館版では、この部分は長い) 字幕4 乃木将軍の手紙の件は、白瀬南極探検関係の書籍などではみかけない。「南極記」「南極探検日記」にも出てこないが、出発前のエピソードとしてフィルムに納められたのだろう。

次に多田の日記に撮影のことがかかれているのは、とんで明治44年10月20日である。第二次探検に向けて多田、田泉らが日本郵船熊野丸で長崎を出帆した時である。船の見送りには地元の女学生たちもやってきて大いに目をひいた。田泉はこの女学生たちを撮影した。(日記、p.276) 11月17日熊野丸は木曜島に着いた。正午島を出帆し南へ向かう。「一小島嶼にある蟻の塔の、奇景多き処を過ぐ、田泉君は早速、これを活動写真のフィルムに、納れた。」(日記、p.291) 映画ではこれらの映像は確認できない。

明治44年11月19日再度南極に出発する日である。田泉は、出発の光景を撮影する。「折しもあれ、武田学術部長は田泉写真技師を指揮して此壮快なる光景を活動写真に撮るべく右往左往飛びまはって居る、隊長の動作を始として武田、池田、三井所、西川、吉野、渡邊、村松の陸上隊畢り(筆者註：撮り終わり)、船長、土屋、酒井各船員幹部の活動振り、渡邊、釜田両水夫の<sup>ブリッジ</sup>橋 オーク、清水機関長以下機関部員の活動振り、水夫全部の作業振り、予並に島事務長の事務振り等が畢る。」(日記、p.307~308) ここで各個人が撮影されている。佐藤忠男が高く評価している、隊長から水夫までを紹介するシーン(字幕8に該当)はこの時撮影されたものかと疑問がわく。しかし、隊員船員各個人の撮影は、また別の時にも行われている。それは、明治45年1月3日、年賀の式終了後に行われた。場所は探検船「開南丸」上である。「式畢ると此度は、活動写真機で、各個の撮影が始まる。今日は隊員一同改良防寒服を着けて、隊帽を被って居るのだから、半チャイニース的にも見えて、一種の風来、なかなか面白い姿である。就中池田君は、支那の儒者式、山邊、花守は馬賊式、馬賊式といへば武田君の御人



相もハマリ相である、かく申す乃公もどちらかといへば馬賊に近い御面相かも知れぬ、此中に隊長はカーキ色の服に、防寒外套を着用、船長は職務服上に毛織胴着といふ、いでたちであった」(日記、p.403) 多田という人は、全くよく書き残してくれていると思う。佐藤忠男の絶賛するシーンは後者、明治45



図2 改良防寒服を着けた池田政吉

年1月3日に撮影されたと思われる。決め手は改良防寒服という服装である。改良防寒服とは「南極記」によれば「和漢洋防寒服と称して、新に黒綾羅紗を表とし裏にはネルを用ゐ、中に真綿を入れた支那服仕立のもの」(p.390)である。隊員たちはこの防寒服を着て、カメラに向かっていている。黒いビロードのような襟がついていて、ボタンではなく、中国服式のとめ方で防寒服の前をとめるようになっているのが映像で確認できる。(図2)従って、隊員たちは1月3日に撮影されたと考えられる。多田が中国人みたいだとかくのは、この改良防寒服のせいである。船員たちも同じ日に撮影されたのだろうか。(隊員と船員については、後に付した南極探検隊員一覧を参照)おそらくそうだろう。毛皮のついた防寒用コートをきたり、毛糸の頭巾のようなもので顔を覆っている人もいる。因みに出発時シドニーは気温が23.7℃、1月3日は「南極記」に従えば、南緯70度、気温は6.6℃である。シドニーでは作業などを行っている所を撮ったとあるから、この気温で毛皮付コートを着てはられないだろう。

参考にあけておくと、「南極記」の口絵に明治45年1月1日撮影と説明のある集合写真が載っている。「南極記」本文によると、元旦は船の揺れが激しいので、甲板での年賀式は延期したとあり、この写真も実際は3日に写したのかもしれないが。)その集合写真と画面に現れる隊員船員の服装は大体同じである。このあたりから判断しても映画の撮影は1月3日と考えられる。ま

た、シドニーでは動作・活動している様子を撮ったとあるが、この各個紹介シーンでは、動作・活動というよりは、“改めてカメラに向いました”という感じである。バックも何か黒い空間で、作業中なら当然カメラに入ってくるとされる荷物や機械や道具などは写っていない。新年の気持ち新たに、記念として各個を撮った時のものと思う。しかし、細かくみると、島事務長と多田は何か書いているところが写っているのも、もしかすると3日に撮ったものではないかもしれない。その書いているところがシドニーでの「予並に島事務長の事務振り」と考えられるかもしれない。（ただし、バックは1月3日の他の人たちと同じ。）多田の表情をみると、作業中をカメラを意識しないで撮ったというよりはカメラに向かうはにかみを、書くという動作でごまかしているような気もする。島事務長の方はあまりカメラを意識していないようだ。船員の中では、高川水夫長、柴田水夫がやけに薄着である。高川はシャツ一枚、柴田は水兵服である。この二人は1月3日、たまたま薄着だったのかもしれないし、シドニー出発時の活動している様子を撮影したときのものかもしれない。柴田は十分カメラを意識して、敬礼を繰り返しておどけている。各個紹介の映像が1月3日に撮影されたものだとすると、出発時に各人の様子を撮影したフィルムは確認できない。

この各個紹介シーンで一つ指摘しておきたいことがある。それは、このシーンの最後に出てくる三浦隊員についてである。三浦隊員は第一次探検にのみ参加している。最初の探検が不首尾に終わり、シドニーに引き返した後、明治44年10月に日本に帰国している。病気のためだという。当然、明治45年1月3日の開南丸には乗っているわけがない。他の隊員船員と写っているバックが全くちがう。字幕がまちがっているとしたら、この人は誰なのか。字幕が正しいとすると、誰がいつ三浦隊員を写したのか。各個紹介シーンで、出てこない人は、撮影者の田泉、吉野隊員、安田木工と三人いるが、「南極記」p.454～455に挿入されている帰国祝賀式の集合写真から判断すると、この人物は字幕どおり三浦隊員と思われる。三浦隊員

だとすると、第一次探検にも映画カメラマンが同行したのだろうか。しかし、その記録はない。まだ日本を出発しない時に撮ったものが残っていて後からつないだのだろうか。はっきりいえるのは、三浦隊員は第一次探検にだけ参加して第二次探検には参加していないので、明治45年1月3日に開南丸に乗っているはずはないということである。従って田泉技師は三浦隊員を撮影していないということである。

話を出發時11月19日に戻そう。隊員船員の活動する様子にカメラをまわした後、田泉技師は、別れの挨拶に船までやってくる人々を撮影した。「此一行が甲板に上り終った処が忽ちレンズに納れられる、相互がグッドバイの握手する処も撮った。」(日記、p.308) さらに「日本人会のランチには田泉技師便乗し西川、渡邊両隊員助手となって本船の進行を撮影する。」(同上)「田泉技師はまんまと撮影し畢った出帆当時の光景は直ちに整理して日本人会に託した。ア、この写真はこゝ四旬の後なつかしき東都の活動写真館に唯一の呼物となって、青年子女の血をわかす材料となるのであろう」(日記、p.309-10) という興味深い記述もみられる。

航海が始まった。11月26日隊員の武田輝太郎のひげ剃りあとの顔を撮影した。(日記、p.319) 11月29日「今日は品川湾頭抜錨の一周年目である。(中略) 武田君は田泉君を指揮して一方この記念を記憶すると同時に、今日の狂瀾怒濤の壮絶の状を撮影することゝした。我等三四の隊員も、この影中に唱歌をやって居る処を入れることにした。(中略) 柴田水夫がミジンマスト昇降及びマストトップ作業の壮快な処をもヒルムに納れた。」(日記、p.324) 柴田水夫の様は出初式の消防夫以上にスリリングだと多田は書いている。残念なことに、この柴田の様子は「日本南極探検」にはない。狂瀾怒濤の状、唱歌の様子も確認できない。12月2日「田泉君は今日の壮絶な波濤の光景をヒルムに納れた。」(日記、p.328) 壮絶の状、壮絶の光景とあるように海は荒れていた。田泉技師は船酔いのせいだろうか、「健康は不良である」と日記にある。(p.326)

12月11日この航海で初めて氷山に遭遇する。以後続々と氷山が現れる。

12日、多田は自分で氷山のスケッチをするがうまくいかないので、病臥中の田泉を無理におこして撮影してもらった。「両君（筆者註：武田、田泉）もいやいやながら、起き出て見ると意外の光景なのに、且つ驚き且つ喜んで、早速渡邊助手も起こして、ヒルムに納れることゝした。写真には若干光線の工合が、どうかと思ふたが、成功して居れば好土産である。」さらに、多田の説明によれば氷堤が崩壊してできるという氷盤の様子も撮影した。（日記、p.346~347）氷山や海の出てくるシーンはいくつかある。字幕9、11、12、13に該当する箇所である。しかし、これらの場面の撮影日は特定できない。翌13日も氷山を撮影した。「船は（中略）氷山の少ない方へ方へと出てゆく、午後6時半—7時半迄一周した大氷山は、高サ二百五十尺周囲三湮大のもので頗る奇形なのであった。田泉技師は、これを活動のヒルムに納れる、スケッチ普通写真等にもものした。」（日記、p.351）この特徴ある氷山は映像で確認することができる。字幕11に該当するシーンで海豹狩り（これについては後述）の後に挿入される左側が塔のようになって二つにわかれてみえる大きな氷山である。（図3）同じ氷山の写真が12月13日撮影と明記されて「南極記」に挿入されている。（p.20~21の間）映画の字幕の順序どおりに解釈すると、この氷山に遭遇するのが明治45年1月1日以降のことになってしまうが、実際は12月13日である。14日もまた大氷山を撮影し、午後11時近くのおそい日没も撮影したとある。（日記、p.353

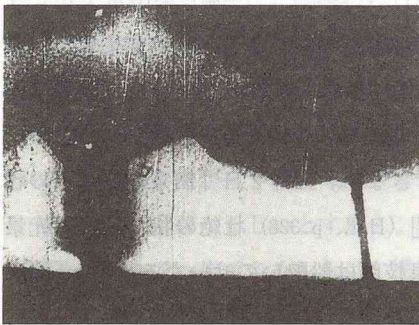


図3 氷山 明治45年の元旦の海は荒れ

~4) 日没はたいへん美しかったと多田は書いている。残念ながらこの日没シーンも確認できない。「南極記」によれば29日、甲板でのんびり過す隊員船員たちを田泉技師が撮影したとある。（p.40）映画の中では確認できない。

ていた。船の揺れが激しいので予定していた年賀式は延期となった。字幕10は元旦となっているが、多田の日記に従えば年賀式が行われたのは3日であり、その式の様子（天皇陛下万歳三唱、祖国に向かって最敬礼）と各個人の撮影が行われた。（日記、p.403）各個人の撮影については先述した。年賀式の映像は確認できない。字幕10に該当する映像は甲板で食事をしているところである。中央に白瀬がいて、なごやかな雰囲気を感じられる。しかし年賀の食事の様子を撮影したと元旦付近の日記にはかかれていない。日記によれば、南極をひきあげて後の明治45年2月5日の記述に「お祝ひの赤のご飯といろいろの鐘詰めの、御馳走が出来て隊員一同は、船艙の側で仮りの食卓が設けられて、ブランや葡萄酒の栓も抜かれ（中略）一行の万歳が祝された。この光景も活動写真のヒルムに納れた。」（日記、p.502）とある。葡萄酒の瓶などが映像にはうつっている。このシーンが字幕説明で年賀の食事とされたのかもしれない。年賀の食事は普通写真では確認でき、こちらは「南極記」p.36～37の間に挿入されている。この写真と映像を比べてみると、映像では白瀬が中央にいるが写真では白瀬は中央に確認できず、また他の隊員たちの様子も同じではない。大きな行事はきちんと記録している多田が新年の祝宴を撮影すれば日記にかくはずと思われるので、ここは字幕どおりには信じられない。

1月4日「田泉技師は、今日も活動のヒルムに、陸地の光景などを納めた。」（日記、p.407）船からみた陸地（もちろん氷におおわれている）の様子も映画にはいくつかあるが、特定は難しい。早稲田版にはなく、白瀬記念館版にある字幕「ロス海（筆者註：ロス海）の氷流」に該当する映像なども、特定しがたい。5日は大捕物があった。海豹の捕獲である。柴田、山邊、花守がボートに乗って、海豹のいる小氷山へむかい、大海豹1頭をしとめた。「田泉君は、この快挙をヒルムにと入れた。」（日記、p.409）字幕11の前半に該当する映像はこの時のものではないだろうか。映像は氷山上で黒いものが4つ動いている様子をとらえた短いものだが、その黒いものは大海豹1頭、捕まえにいったひと3人であると思われる。この数も日記

の記述と一致する。字幕12に該当する映像の前半は、人が船に上がるところと甲板で何かしているところ、後半は氷山である。この前半部分は海豹狩りから船にもどって、字幕12にかかっているように、海豹の解体作業をするところなのだろうか。多田の記述がなくはつきりしない。(またこれとは別と思われる海豹狩の映像が白瀬記念館版で確認された。「南極記」p.70~71に挿入された写真と同じ光景である。隊員の誰かが氷上で海豹を棒でたたいている。写真のキャプションによれば1月14日である。この日の狩については多田の日記に記述はあるが、撮影されたとはかいていない。) 同じく5日の午後、アデリーペンギンを8羽捕獲した。ペンギンは甲板で板囲いの中に入れられた。この様子も撮影した。(日記、p.410) 映画の中にこの映像はない。ただし、このペンギンたちとのほほえましい記念集合写真が「南極記」p.60~61に挿入されている。余談であるが、多田はペンギンたちに「捕獲の憂鬱を慰藉すべく」尺八をきかせてやった。(日記、p.411) 1月7日よい土産としてペンギンを生かして日本まで連れかえろうとしたが、無理なので剥製にしてしまった。同日「三井所君は一生懸命に田泉君と共に片吟<sup>ぺんぎん</sup>の写真に力める。」(日記、p.416) と多田は記している。三井所は普通の写真を担当しており、文脈からは田泉が三井所の写真撮影を手伝ったとも読めるし、田泉は映画撮影したとも読める。いずれにせよ、船上のペンギンの映像は映画の中では認められない。8日「田泉君は、今日も二三度、武田君に指揮されて奇雲を撮影した。」(日記、p.418) 奇雲も、映画の中では確認できない。

1月11日「船は益氷堤近くなったので、田泉君は活動写真のヒルムに、この壮観な処を納れた。隊長以下の隊員も亦ヒルムに納れる。」(日記、p.424) 字幕12に該当する映像の後半部には氷山なのか、氷堤なのかはつきりしないが大きな氷の壁が出てくるので、この時近づいた氷堤かもしれない。隊長以下というのは、どういう状況の撮影かよくわからない。この撮影が先述の各個紹介シーンに混ざっていたりするのだろうか。

1月16日探検隊は適当な上陸地点をさがして航行を続けるが、終に午後

10時、鯨湾に投錨した。「南極記」によれば西経164度30分、南緯78度30分付近である。(p.84、挿絵) すぐに上陸の準備にかかった。上陸が完了したのは18日の午後である。字幕14、15、16、17に該当する映像は上陸時の荷揚げ作業と思われる。18日の多田の日記に「此間の光景(筆者註: 荷物の運搬作業)を田泉技師は活動写真に納れた。」(日記、p.448) 多田の日記には18日の項でしか撮影の記録がでてこないが、田泉は荷揚げ作業全般にわたって撮っていたと思われる。早稲田版では確認できないが白瀬記念館版では、荷揚げ作業で橇をひいている(字幕14に該当する映像)バックにフラム号がうつっている。また、白瀬記念館版には、早稲田版字幕14と15の間に「隊長以下七名(筆者註: 実際は5人) 決死の突進隊を組織して一路南極点? (筆者註: 字幕の下が切れているので推測) に直進せんとす……船を離れて雪に喜ぶ樺太犬……」という字幕で説明される映像がある。ここで犬橇の映像が確認できる。犬橇を撮影したという記録は多田の日記にはないが、田泉の記憶と一致する映像である。

1月17日、同じ時期南極にきていたアムンゼンの探検船フラム号を日本側がまず訪問した。その返礼としてフラム号より船長と活動写真技師が開南丸にやってきて、開南丸を撮影した。(日記、p.444) このフィルムはノルウェーのどこかに残っているのだろうか。

18日には、ちょっとおもしろいことを多田は記録している。「昨日今日捕へた片吟<sup>ペンギン</sup>を全部放ちて片吟群の撮影や活動写真を試む、是に於て乎、完全なる片吟群のフィルムも成功したのである、」(日記、p.446~447) 17日、上陸作業中にアデリーペンギン数羽を捕らえた。(日記、p.443) 18日の朝にも、今度はエンペラーペンギン2羽を捕らえ、田泉が撮影した。(日記、p.446) 探検隊ではペンギンが土産として最適と考えていたので、しばしば捕獲した。この時もよい機会なので捕まえたのであろう。捕まえると剥製にしていた。字幕24、25に該当する映像にはペンギンが登場する。特に字幕25に該当する映像は、隊員がペンギン(アデリーペンギンと思われる)を追いかけまわす様子が実におかしく、笑いすらおきる箇所である。この



図4 ペンギン (映画より)

ペンギンの映像は多田の説明どおり18日に一度捕まえておいたのを放して撮ったというものではないだろうか。「南極記」p.106～107に挿入された写真(キャプションに1月18日撮影とある)とも酷似しているので、そう推測される。

(図4)字幕25にはエドワード七世洲とあるが、探検隊がここへいくのは実際はもう少し後である。(年表を参照)このペンギンは字幕説明のエドワード7世州ではなく、上陸した鯨湾で撮影したものと思われる。一度捕まえたものを放して、あたかも氷原にいるように撮影するのは、いわば“やらせ”であるが、多田をはじめ隊員たちは剥製ではなく何とか生きたペンギンをつれて帰り人々にみせたかったのだ。その熱意が一度捕まえたものを放してから撮影するという“工夫”をうんだのだと思う。このような“工夫”があったおかげで当時の人たちは“動くペンギン”をみることができた。今のように簡単に実物をみられるわけではなく、多くの人はペンギンなど知らなかったのである。ちょこちょこ動きまわるペンギンと弁士の説明で活動写真の客席は大いにわいたと思う。探検隊員たちですら、第一次探検で初めてペンギンを見た時は、魚か鳥かわからず不思議なものと思い、それがペンギンとわかった時はひどく興奮したのである。

1月19日探検隊は、白瀬、武田、三井所、山邊、花守の5人からなる極点方向へ進む突進隊、松村、吉野の根拠地観測隊、残りの隊員・船員で開南丸に乗ってエドワード7世州探検にいく沿岸隊に分かれ、それぞれ活動を始める。田泉は沿岸隊とともに行動することになる。沿岸隊は19日午後、鯨湾を出発する。

先に大きな疑問をのべてしまおう。カメラマンである田泉は沿岸隊に同



行している。白瀬隊長の突進隊には活動写真の撮影技師はいない。字幕21、22に該当するシーンは誰が撮影したのか？ どうやって映画の中に挿入したのか？ このシーンは、字幕にあるとおり南緯80度5分まで進行し、そこに記念の旗をたて、探検に同意してくれた人の名簿を納めた銅の箱を埋めた時の模様である。「南極記」にも同様の写真が同様のキャプションとともに掲載されているので、その時の様子であることは確かである。ただし、映画のカメラマンである田泉技師はこちらにはきていない。もし、映画撮影用のカメラが複数あれば突進隊の誰かが撮影したとも考えられるが、映画撮影用のカメラが複数あるという記述は探検記の類にもみあたらない。そこで誰がどのように撮影したのか非常に疑問に思うのである。いうまでもないが、田泉が沿岸隊と突進隊とを行ったり来たりは不可能である。突進隊は根拠地よりおよそ300キロ（この数字は「雪原に挑む白瀬中尉」記載（p.144）のものを参考にした）も進んでおり、また沿岸隊は沿岸隊で海上をエドワード7世州に向かっているわけでヘリコプターでもなければ行ったり来たりはありえない。南極探検をドキュメンタリー映画にする場合、到達最南地に記念の旗をたてる様子は絶対におとせないシーンである。いわば、作品のハイライトで、演出構成を考える上で当然ねらうシーンである。田泉カメラマンをなぜ、突進隊に同行させなかったのか。最初からその予定がなかったのか、田泉を乗せる余裕が糧になかったのか、田泉の体力が糧での行進に耐えられないと思われたのか。多田の日記には、よく具合の悪くなった田泉についての記述がある。ともかくも田泉技師が南緯80度5分のシーンを現地で撮影していないことは、彼が突進隊に同行していないことによりまちがいない。

では、なぜこのシーンが映画「日本南極探検」の中にあるのだろうか。おそらくこのシーンは前述したように、映画の構成上欠かせないと思われたからであろう。また、田泉が撮影するのが不可能であったこのシーンはどうやって映画の中に編集されたのか。筆者は、撮影、現像、編集などの技術面にうといので、技術畑の人にとっては笑止かもしれないが、以下の

三つのやり方を推測してみた。第一、南緯80度5分地点の様子は「南極記」によれば三井所衛生部長が写真撮影したとある (p.142) ので、そのフィルムを映画につないだ。第二、三井所が撮影した写真を後日、映画カメラで撮影し、そのフィルムを挿入した。第三、実は南緯80度地点ではないどこかで、いわゆる“やらせ”で田泉が撮影した。(第一についてはパフォーメーションの数が普通の写真のフィルムと映画のフィルムとはちがうので無理ではないかとの指摘も受けた。第三については、こういうことをしていれば多田が何か記録を残していそうだが、みあたらない。また、探検隊の心意気からして少し考えにくい。) 第一、第二、第三のいずれ、もしくは何か別の方法でいれたにせよ、このシーンは、旗が風になびいている途中のかっこうで静止して、写っている人々も全く動かないまさに“静止映像”なのである。

沿岸隊は1月23日ビスコー湾に投錨する。すぐに上陸を開始した。「西川、渡邊両隊員は、田泉写真技師と共に、一隊となり。(中略) 二日間の糧食、器具、写真器械一式等を一台の橇に満載して、三名協力してこれを曳きつゝ進む。」(日記、p.463) 田泉はここで、多田と別行動になった。字幕20に該当するシーンは上記の西川、渡邊がアレキサンドラ山をめざして進んでいるところである。(字幕ではアレキサンドル山となっているが、「南極記」ではアレキサンドラ山と表記されているので、「南極記」にしたがった。) 大きな氷壁の下を、二人の隊員が進んでいく。最初二人の頭が画面下方に現われるだけなのではっきりしないが、いうまでもなく西川、渡邊が進んでいくところで、多田の日記には記述はないが、その様子を田泉が撮影しているわけである。(白瀬記念館版では、頭だけではなく西川、渡邊が橇をひいて進む全身がはっきりと撮影されている映像が確認できる。) 多田もまた、別方向からアレキサンドラ山の探検に行き、その途中から引き返し、西川、渡邊、田泉の後を追う。そこで、田泉が引き返してきたのに出会う。訳をきくと、道が非常に危険で二人についていけないので、戻ってきたということである。西川、渡邊両人は「橇を棄て、少しの糧食と写真器<sup>(マフ)</sup>及標本採集器等を携へ」て先へ進んだ。(日記、p.466) 棄てた橇には「写真器の一部…」

が残っていた。この一部を多田が持ちかえった。(日記、p.468) この写真器とあるのは、田泉の持って行ったワーウィックのカメラのことだろうか。字幕20に該当するシーンの後半に、西川、渡邊のたてた記念の杭(映像ではほとんど確認できないが、「南極記」によれば「大日本南極探検隊沿岸隊上陸記念標」とかかっている、p.191)がわずかだが写る。この時にはもう田泉は帰途についているのであるから、この杭の映像は二人のうちどちらかが撮影したのだろう。西川、渡邊は助手として田泉の撮影を助けており(日記、p.308、346~347)カメラがある程度扱えたと思われるが、どんなものだろうか。余談だが、戻ってきた田泉は「半病人の姿」(日記、p.470)とある。

2月3日、沿岸隊は根拠地に戻り、先に帰っていた突進隊とも合流しいよいよ南極引き上げが開始された。根拠地と開南丸の間を伝馬船、短艇で往復して荷物をかたづけるのである。海は凍り始めている。「短艇には土屋運転士以下三名及田泉写真技師が乗り込むで発した。これは収容の時の光景を、活動のヒルムに納れる為めである。」(日記、p.499)字幕26に該当するシーンである。このシーンは凍り始める海、伝馬船をこぐ有様などが迫力をもって鮮明にとらえられている。

このあとコールマン島にも立ち寄る予定で田泉はフィルムを残した。(前掲島崎清彦論文)しかし、白瀬の判断で立ち寄らなかった。2月4日の引き上げを含め、この判断に対して隊員の不満は残った。特に、多田は怒りと失望が大きかった。それでも5日には探検の無事成功を祝って赤飯などでお祝いをした。「この光景も活動写真のヒルムに納れた。」(日記、p.502)これについては明治45年元旦の所で述べた。11日は紀元節の祝賀式を行った。この式の様子も「活動のヒルムに撮った。」(日記、p.510)しかし、現行の映画では確認できない。3月23日、ウェリントンに帰港した。そして、25日、ヤング領事が開南丸を訪れた。この様子も撮影している。(日記、p.563)29日「田泉技師は、朝から高川水夫長と共に、上陸して海中や、海岸の風向を活動のヒルムに納れた。」(日記、p.569)これらは確認できない。

田泉の撮影についての多田の日記の記述はこれが最後である。田泉は、映画公開＝探検資金回収のために、ひとあし早く別便で帰国する。従って、多田の日記でたどれるのはここまでである。字幕28に該当する映像はウェリントン帰港を出迎えるランチやそれに乗っている人々である。しかし、ウェリントン帰港の際の撮影については上記の3月25日のヤング領事来訪のことしか記されていない。筆まめな多田のことである。画面にみられるような派手な歓迎ぶりを撮影したとあれば、必ず日記にかいておくと思うのだが、そういう記述はない。多田は、この探検に多少失望しており、白瀬に対して反感ももっているが、記録者としてのプライドはもっていて公式記録を残そうとしている。「日記」に対して、「南極探検私録」では探検や白瀬に対する批判、個人的見解を明らかにしている。多田と白瀬の確執については網淵謙錠の「極」に詳しい。したがって、多田がなげやりな気持ちになって、きちんと記述しないということは考えにくい。むしろ、きちんとした記述を残すことで、白瀬に対する自分の気持ちの正当性を証明しようとしているように思う。日記に記述がないのだから、撮影はしなかったのであろう。このシーンは、先述した第二次探検のシドニー出発時の見送りの様子を撮影した映像が、ウェリントン帰港を喜ぶ人々という字幕で、ここに繋がれているのではないだろうか。ただし、筆者の力ではバックの景色がウェリントンなのかシドニーなのか判断できないので断定しかねる。

以上、多田の日記に則して検討したわけであるが、日記にはかかれていない撮影場面がいくつか映画にはある。くりかえしになるが、字幕1～7の田泉が同行する以前のこと（田泉同行以前については先述）、字幕19、23の開南丸、字幕24のアザラシ及びペンギン、字幕29以下品川到着の歓迎から大隈邸での帰国祝賀式、これはいったい誰が撮ったのだろうか。以下簡単に考察してみる。

開南丸はおそらく田泉が撮影したと思われるが、場所は字幕説明どおりかは不明である。字幕19に該当する映像の白瀬記念館版のものには、後半早稲田版にはない開南丸のまわりを漕ぐボートがうつっているが海上には

氷一片すらない。(字幕28に該当する映像の一部ではないかと思われる) 早稲田版には船尾にかいてある開南丸という名前がはっきりうつっている。また、字幕23の開南丸は19と同じ映像のような気がする。アザラシとペンギンについても、おそらく田泉が撮ったのであろうが、多田の日記には記述がない。従って、いつ、どこで撮影されたのかは確定できない。字幕では大隈湾となっているが、大隈湾(西経158度40分南緯77度50分付近、船員が命名)にはペンギンがいるときいてきたのに、実際はいなかったという記述が南極記にある(p.207~209)ので、字幕24のペンギンに関しては大隈湾で撮ったものではないだろう。この映像にうつっているペンギンはアデリー種(字幕25の映像)よりは大きいのでエンペラーペンギンであろう。白瀬記念館版は早稲田版よりペンギンのシーンが長く、早稲田版にないアデリー、エンペラーが混ざって居るところやエンペラーペンギンがたくさん居るところがみられる。品川到着の様、大隈邸での祝賀式は、誰が撮影したのだろう。品川到着時には「二三の活動写真隊」が来ていたと東京日日新聞明治45年6月21日号にある。先に帰っていた田泉が来ていたか、Mパター社の別の人が撮影したか、全く別の会社の人が撮影したか、はっきりしない。

以上が映画「日本南極探検」に残っている映像と多田の日記に記された撮影に関する記述を照合してみた結果である。推測の域を出ないものが多いのは筆者の力不足による。厳しいご指摘などをいただければ、幸いである。

筆者は、この原稿の総まとめと何か新しい発見はないかという気持ちで、締切一ヵ月前に秋田県金浦の「白瀬南極探検隊記念館」を訪れた。原稿を抜本的に書き改めなければならないような“発見”があったらたいへんだなと内心思っていた。記念館は平成2年に開設された。黒川紀章氏の設計である。(余談であるが、記念館のオープン時記念写真には黒川氏夫人の若尾文子さんが写っていた) 会場で随時上映されている映画「日本南極探検」をみた。筆者が早稲田大学図書館、フィルムセンターでみたものにはなかった映像

があった。これは一大事と早速、町役場企画室のオチ小柳さんの好意に甘えて、ビデオをお借りした。早稲田、フィルムセンターと編集・構成はほぼ同じである（抜本的書き改めはまぬがれた）が、細かくみると、同じ字幕に該当する映像が大体において白瀬記念館のものの方が“長い”のである。たとえば、芝浦の見送り、上陸のシーンで開南丸から櫓をひっぱって行くところ、ペンギンとアザラシ、アレキサンドラ山を探検する西川・渡邊、氷山・流氷、etc. 白瀬記念館版をみることによって、当時の新聞にかかれていたことや田泉氏の回想にのみあったことが確認できて非常に良かったと思っている。

#### ☆参考文献

- 多田恵一「南極探検日記」 前川文栄閣 1912（大正元年）  
南極探検後援会「南極記」 成功雑誌社 1914  
渡部誠一郎「雪原に挑む白瀬中尉」（増補改訂第3刷） 秋田魁新報社 1991  
網淵謙錠「極：白瀬中尉南極探検記」（新潮文庫） 新潮社 1990  
佐藤忠男「日本記録映像史」 評論社 1977  
「講座日本映画 1：日本映画の誕生」 岩波書店 1985  
田中純一郎「日本映画発達史 1」 中央公論社 1980  
田中純一郎「日本映画史発掘」 冬樹社 1980  
島崎清彦「白瀬中尉南極探検の記録映画とその技術」（映画テレビ技術No.202、1969.6）  
東京日日新聞

#### ☆映像資料

- 早稲田大学図書館蔵「日本南極探検」（ビデオにて使用）  
白瀬南極探検隊記念館蔵「日本南極探検」（ビデオにて使用）  
東京国立近代美術館フィルムセンター蔵「日本南極探検」（「フィルムは記録する'97」（1997年2月11日～3月29日）において筆者は会場で二回みた）

謝辞：白瀬南極探検隊記念館蔵「日本南極探検」のビデオを快く貸して下さった金浦町役場企画室小柳さんに改めてお礼申し上げます。

## 【別紙】

字幕採録（フィルムセンター所蔵のものと早稲田大学図書館所蔵のものから採録した）

※ 字幕の旧漢字は現行漢字に改めた。かな使いは字幕にあるまま。左側数字は筆者が本文への引用のため付した。

※ ( ) 内イタリックは白瀬記念館版にある字幕

0. (タイトル)日本南極探検
1. 出発前  
三十頭の樺太犬も  
脾肉の嘆を訴へて  
居たので大係の  
アイヌ花守が  
上野山中で曳櫓の  
猛練習……
2. 極地探検  
隊用用具  
自記湿度計  
コロノメーター  
セキスタンド  
トランシット  
ロビンソン風力計  
南極星座表
3. 出発前日  
大隈邸内に  
於ける  
日本南極探検隊  
一行
4. この前日  
佐々木安五郎氏が  
乃木將軍を訪ふて  
探検の壮挙を語られ  
たに対し將軍から懇  
篤な手紙が来て居た
5. 明治四十三年  
十一月二十八日  
出発当日芝浦埠頭  
の袂別式光景  
(芝浦埋立地に殺到  
する見送りの群衆  
と長広舌を揮ふ  
大隈老公)
6. 『一発の実弾は  
百発の空砲に  
優る』  
(学生連より署名を  
迫られつゝある  
白瀬隊長)
7. 解纜して  
祖国品川湾頭を  
辞する  
探検船 開南丸  
開南丸の命名者  
東郷提督揮毫の船名
8. 船内に於ける  
隊員、船員  
白瀬隊長  
野村船長  
武田学術部長  
池田農学博士  
三井所衛生部長

- |                              |             |
|------------------------------|-------------|
| 多田書記長                        | (前人未踏       |
| 清水機関長                        | ビスコー湾)      |
| 土屋一等運転士                      | 11. 流氷の上に   |
| 村松会計主任                       | 海豹を猟し       |
| 西川糧食係 (早稲田大学図書館所蔵のものは字幕のみ欠落) | 無聊を慰めつゝ……   |
| 渡邊隊員                         | 時に大陸かと疑はるゝ  |
| 山邊犬係                         | 一大氷山の出現に驚   |
| 花守犬係                         | き乍ら…        |
| 島事務長                         | 12. 海豹の肉は   |
| 酒井運転士                        | 食糧となり       |
| 高川水夫長                        | 脂肪は汽罐の      |
| 三宅見習運転士                      | 燃料とし        |
| 釜田水夫                         | 皮は塩漬けとして    |
| 渡邊水夫                         | 蔵して持ち帰った    |
| 柴田水夫                         | 13. 前人未踏    |
| 藤平機関士                        | ビスコー湾       |
| 杉崎火夫                         | 14. 明治四十五年  |
| 濱崎火夫                         | 一月十八日       |
| 福島水夫                         | 船はあこがれの南極   |
| 三浦隊員                         | 鯨湾に到着した     |
| 9. 暴風、怒濤と闘ひ                  | 四面に白皚々      |
| 流氷、氷山を避けつゝ                   | アドミラル山脈は    |
| 南に進むこと四十日                    | 指呼の間にある     |
| にして船は刻々と                     | 休養の閑もなく隊員   |
| 極地に近づく                       | は上陸準備を急ぐ……  |
| 10. 明治四十五年                   | (隊長以下七名     |
| 一月元旦                         | 決死の突進隊を     |
| 南緯六十九度四十分                    | 組織して一路南極 (点 |
| 東経百七十一度十五分                   | に直進せんとす……   |
| 怒濤デッキを洗ふ                     | 船を離れて       |
| 南極圏附近で一行は                    | 雪に喜ぶ樺太犬……)  |
| 年賀の祝杯を挙げた                    | 15. 鯨湾上堤上に  |
| (コース海の氷流)                    | 上陸した。上陸隊は   |
|                              | 茲を根拠地と定めて   |



- 先ず天幕を張った
16. 隊員は野氷を涉って  
氷堤を攀ぢ先ず  
氷堤上に根拠地を  
定むべく努力した
17. 氷堤の断崖に開鑿さ  
れた険しい坂路は  
荷物を運んで居る間  
に降雪のため歩け  
なくなる  
隊員は更に道を開い  
ては荷物を運んだ
18. 突撃隊の根拠地
19. 明治四十五年  
一月十九日  
開南丸は別働の  
沿岸支隊を乗せて  
ビスコ湾に向ふ
20. 支隊の西川 渡邊  
両隊員は身を挺して  
アレキサンドル山頂  
(一、五〇〇呎) を  
目ざして進んだ  
昼夜の糧食を用意し  
て帰還せざること  
五十時間に及び遂に  
搜索隊を出すに至った
21. 突撃隊は二百余哩を突進  
遂に南緯八十度五分の  
最終コースに入りこゝを  
『大和雪原』と命名した  
実に明治四十五年一月  
二十八日午前零時半  
白瀬隊長、武田学術部長
- 三井所衛生部長は  
遙かに天間を拝して  
限りなき感慨に耽った
22. 標記を樹て  
同情者芳名簿を納め  
たる銅函を埋蔵し  
恭しく陛下の万歳を  
三唱した  
大和民族の足跡は  
明確に南極大陸に  
印せられた
23. エドワード七世洲  
碇泊中の開南丸
24. 大隈湾に於ける  
ペンギン鳥及  
アザラシ
25. エドワード七世洲に  
上陸して  
ペンギン鳥を  
捕らへつゝある隊員
26. 明治四十五年二月四日  
わが開南丸の一隊は  
無量の感慨を鯨湾  
にのこして遂に南極  
を引揚げた  
見る見る間に  
すさまじき音を立て  
海上は氷結し始めた
27. 開南丸の航路と  
陸上隊行進の  
足跡
28. 我が開南丸が極地を  
征服して帰った  
ニューゼーランド北島

ウェリントン港の  
人々は歓喜して  
一行を迎えてくれた

29. 一年八ヶ月の日子を  
費やして  
明治四十五年六月  
二十日 品川湾に  
帰航の開南丸

30. 帝都幾万の同胞は

熱狂して探検隊の  
帰還を迎えた

31. 大隈邸に於ける  
南極探検隊一行  
の祝賀式

32. 終

(白瀬記念館版の終の画面は早稲田  
版とちがう)

## 南極探検関係年表

※南極探検後援会編集「南極記」網淵謙鋭「極：白瀬中尉南極探検記」渡部誠一郎「雪原に挑む白瀬中尉」などを参考に作成した。

明治42(1909)	幼い頃より、北極探検をめざした白瀬轟中尉は米国のペアリー中佐が北極点踏破に成功したのを知り、南極探検に目的を変える。
明治43(1910)	<u>1月</u> ：白瀬は英国のスコット大佐と南極点到達を争うことを決意する。帝国議会に南極探検の経費を請願する。議会で3万円支給することを決めるが、政府は支給しなかった。 <u>5月</u> ：東京日日新聞、萬朝報が南極探検を報道。朝日新聞社など新聞の応援で国民的関心が盛り上がっていく。成功雑誌社長村上濁浪が国民的関心の盛り上げに尽力する。 <u>6月</u> ：南極探検隊員となる多田恵一（応募第一号）、野村直吉に出会う。隊員希望者がおしかける。 <u>7月</u> ：5日東京・神田錦輝館で南極探検発表演説会が開かれる。会場は超満員。同日、南極探検後援会ができる。（会長は大隈重信）この時点での出発予定は8月5日。（しかし、出発は準備、特に乗って行く船の調達に手間取りズルズルとおくれていく） <u>11月</u> ：24-25日芝浦で開南丸の一般公開。26日大隈邸にて送別式。午後3時より日比谷公園音楽堂前式場で国民的送別会。28日芝浦で送別式。隊員船員合わせて27名。29日品川を出帆。（第1次南極探検）
明治44(1911)	<u>2月</u> ：8日ウェリントンに到着。11日ウェリントンを立ち、南極へ向かう。3月：12日東経172度7分、南緯74度16分、氷の海に閉じ込められる危険が増す。14日再挑戦を期して引き返すことを会議で決定。5月：1日シドニー港に到着。17日野村船長、多田書記長日光丸で一時帰国。（事情報告、再挑戦への準備など） <u>9月</u> ：16日野村船長シドニーに向かって横浜を立つ。食糧・船具を伴う。 <u>10月</u> ：6日三浦幸太郎隊員（炊事係）病気のため熊野丸で帰国。14日多田、田泉撮影技師、池田農学博士（後者2名は新たに探検隊に加わる）横浜を出発。新調した防寒服、学術器械、大天幕、樺太犬29頭を伴う。18日野村船長シドニー着。 <u>11月</u> ：16日多田、田泉、池田シドニー着。19日第2次南極探検へ出発。（第

2次の目的は極点到達ではなく主に学術調査に変更) 12月: 11日氷山に遭遇。以降続々と流水、氷山が現れる。上陸後の行動及部署が白瀬隊長から発表される。突進隊(白瀬、武田、三井所、山邊、花守) 沿岸隊(池田、吉野、西川、村松、渡邊近三郎、田泉、多田、ただし吉野・村松は観測隊として根拠地に留まる) 21日東経177度線から南極圏内に入る。

明治45(1912)

1月: 1日元旦。波風が激しい。拝賀式は3日に延期となる。3日陸地がみえる。ロス海に入る。5日柴田、山邊、花守、流水上のアザラシを捕らえる。船上で、解体して調査した。臓腑と脂肪は犬の食糧、最上肉は隊員の食糧とし、皮は塩づけにして標本用に保存。ペンギン8羽も生け捕りにする。12日上陸予定地点の鯨湾近づく。流水多く一進一退を繰り返す。13日流水多く、進行は相変わらず困難。14日依然として氷海にあるが上陸地点に向い南進する。16日エドワード7世州方面に上陸を変更する。適当な上陸地を捜しながら航行する。7:30武田、土屋、渡邊(鬼)、花守の4人が上陸地点を確認しにボートで行くが、不可能な場所と判明し9:20頃船に戻る。その地点にあった大氷河を「四人氷河」、その湾を「開南湾」と名付ける。位置は西経162度50分、南緯78度17分。上陸地点に関して協議し、突進隊は鯨湾に上陸し、船は沿岸隊を乗せてエドワード7世州に向かうことに決定した。午後ノルウェーの探検船フラム号に出会う。22:00鯨湾に入港、碇泊し上陸の準備をする。西経164度30分、南緯78度30分。16日深夜~17、18日突進隊の根拠地設営準備のために道路の開削、荷物の陸揚げ、運搬、天幕の設営を必死で行う。17日フラム号を野村船長、三宅(通訳)が訪問。夜フラム号よりニールセン船長が活動写真技師とともに開南丸を訪問。18日15:00荷物の陸揚げ終わる。村松、吉野、観測隊として根拠地に留まることが決まる。19日開南丸は沿岸隊を乗せてエドワード7世州へ向かう。(以下、①突進隊=極点方向へ向かう、②観測隊=根拠地での観測、③沿岸隊=エドワード7世州の探査の順序で記述する) ①突進隊20日正午突進隊出発。走行距離15Km。21日走行距離15.2Km。22日走行距離25.3Km。23日走行距離35.3Km。24日走行距離38Km。25日走行距離34Km。26日走行距離22.4Km。27日走行距離93.5Km。28日0:30進行を停止する。27日夜半より停止までの走行距離4 Km。

最終到達地点西経156度37分、南緯80度5分。12：20探検同調者の芳名簿を納めた銅箱を埋め、その傍らに国旗、回転旗をたてた。万歳三唱。この地点を大和雪原と名付ける。14：30最終点出発。31日5：50根拠地に帰りつく。観測隊と記念撮影。②観測隊（省略）③沿岸隊19日8：00鯨湾口に向い石炭の処理をしてから17：30エドワード7世州へ出発。23日16：00ビスコー湾の氷上に投錨。西川、渡邊（近）隊員、田泉技師はアレキサンドラ山脈の踏査に出発する。途中田泉技師は危険を感じ二人とわかれて投錨地に戻る。24日6：00西川、渡邊はアレキサンドラ山脈中の急峻の下に達した。しかしこれ以上進むことは困難であった。その地点に「大日本南極探検隊沿岸上陸記念標」たてる。両名がもどらないので、捜索隊をだすが無事もどる。24：00繋留地点を出発し東へ向かう。（前人未航の海を確認するため）26日石炭が減少し、流氷も多く進行がむずかしくなったので、西経151度20分、南緯76度6分から引き返す。（スコット隊よりも40分おおく東に進んだ）29日帝王ペンギンが群集しているときいていた小湾に上陸するがペンギンはいなかった。この湾を大隈湾と名付ける。西経158度40分、南緯77度50分。30日大隈湾を出て鯨湾に向かう。2月：2日鯨湾にもどる。3日帰国のための乗船準備（根拠地の荷物の回収・運搬、犬の収容、隊員の乗船）が開始される。4日引揚げ完了。またたくまに海が凍りはじめた。開南丸は、氷の海に閉じこめられるという危機を間一髪でのがれ、鯨湾を後にした。3月：23日ウェリントン入港。30日白瀬、村松、武田、池田、田泉、安田は別便にて帰国の途につく。白瀬、多田の探検の計画・成果の評価などをめぐる対立が強まる。4月：2日開南丸はウェリントンを発つ。5月：12日白瀬一行長崎着。16日白瀬一行横浜着。6月：19日18：00開南丸横浜に投錨。20日開南丸芝浦埠頭に帰還。歓迎式。会衆約5万人。21日大隈邸で帰朝報告式。庭園で記念撮影。25日青山御所にて活動写真の台覧。皇太子（大正天皇）より500円の御下賜金をいただく。28日浅草国技館で映画の公開。

## 日本南極探検隊員（「南極記」による）

第一次（明治43年11月28日～明治44年5月1日シドニー帰着まで）

### ☆ 上陸隊員

隊長：白瀬轟 學術部長：武田輝太郎 衛生部長：三井所清造  
書記長：多田恵一 糧食係：西川源蔵 被服係：吉野義忠  
炊事係：三浦幸太郎（第一次のみ参加） 犬係：山邊安之助  
犬係：花守信吉

### ☆ 船員

船長：野村直吉 一等運転士：丹野善作（第一次のみ参加）  
機関長：清水光太郎  
二等運転士：土屋友治 三等運転士：酒井兵太郎 事務長：鳥義武  
木工：安田伊三郎 油差：藤平量平 機関士：村松進  
水夫長：高川才次郎 舵取：佐藤市松（第一次のみ参加）  
舵取：渡邊鬼太郎 舵取：釜田儀作  
火夫：杉崎六五郎 火夫：高取壽美松（第一次のみ参加）  
料理人：渡邊近三郎 水夫：柴田兼次郎 水夫：福島吉治

第二次（明治44年11月19日シドニー出発～明治45年6月20日帰国まで）

### ☆ 上陸隊員

隊長：白瀬轟 第一學術部長：武田輝太郎  
第二學術部長支隊長：池田政吉（第二次のみ参加）  
衛生部長兼写真班長：三井所清造 被服係：吉野義忠 糧食係：西川源蔵  
隊長秘書：村松進 學術部其他助手：多田恵一 炊事専務：渡邊近三郎  
活動写真技師：田泉保直（第二次のみ参加） 輓犬係：山邊安之助  
輓犬係：花守信吉

### ☆ 船員

船長：野村直吉 一等運転士：土屋友治 機関長：清水光太郎  
事務長：鳥義武 二等運転士：酒井兵太郎 木工：安田伊三郎  
水夫長：高川才次郎  
機関士：藤平量平 運転士見習：三宅幸彦（第二次のみ参加）  
舵取：渡邊鬼太郎 舵取：釜田儀作 油差：杉崎六五郎  
水夫：柴田兼次郎 水夫：福島吉治 火夫：濱崎三男作（第二次のみ参加）  
(いわさ けいこ 整理課)